

(対象事業：2. 先進的な展示・教育普及手法の開発等の事業)

事業名：展覧会事業における教育普及プログラムの開発：ワークショップおよびワークシートを中心として

事業者名：（財）横浜市芸術文化振興財団

連携事業館名：小中学校（横浜市内）、小学校図工研究会、中学校美術研究会、横浜市立高等学校教育委員会美術工芸部会

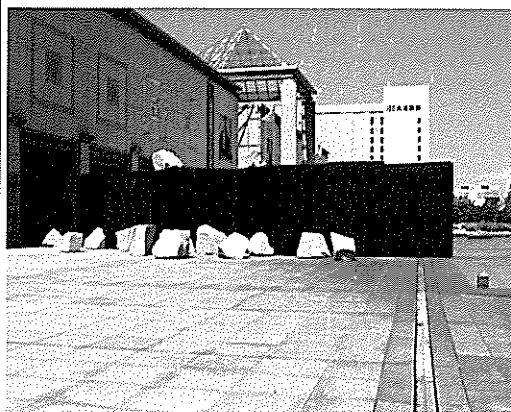
住所：横浜市西区みなとみらい3-4-1

TEL : 0 4 5- 2 2 1- 0 3 0 0

FAX : 0 4 5 - 2 2 1 - 0 3 1 7

HPアドレス: www.art-museum.city.yokohama.jp

外觀写真



①施設概要

横浜美術館は、1989年(平成元)3月に、横浜博覧会の施設として開設し、同年11月3日に開館した。「みる」「つくる」「まなぶ」の連携を基本方針として設立された横浜美術館は、コレクションの形成、展覧会の開催という「みる」だけでなく、実技指導やワークショップの実施、美術情報の提供など、市民に広く開かれた芸術活動の拠点となっている。

②事業の意図目的

現在、美術館は、利用者の多角的なニーズを読み取りながら、これに対応することによって、事業を活性化させる必要に迫られている。展覧会事業においては、来館者が能動的かつ自主的に鑑賞体験できるよう、ワークショップやワークシートなどの様々な教育普及プログラムが試みられている。本事業は、美術館のコレクションを活用した展覧会と現役のアーティストを取り上げる現代美術の展覧会をモデルケースにして教育普及プログラムにおける6つのパターンを設計し、実際に横浜美術館で開催される展覧会においてこれを試験導入し、その効果や課題を検証することを目的とした。

③事業概要

当館の運営の基本方針である「みる」「つくる」「まなぶ」の連携をより強固にするべく、今年度実施した「わたしの美術館展」「李禹煥 余白の芸術展」「クリストファー・クック展」において、次の6つの教育普及プログラムを関係セクションと協働して実施した。A) 館蔵品を使った小中学生を対象にしたワークシート、B) 館蔵品を使った小学生と保護者を対象にしたワークショップ、C) 館蔵品を使った中学生以上を対象としたワークショップ、D) 出品アーティストは直接参画せずその作品のみを活用するワークショップ、E) 出品アーティストが参画するワークショップ（アウトリーチ）、F) 出品アーティストが参画するワークショップ（美術館内で実施）。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト **ワークシート** その他（缶バッジ）

作成した報告書等

ビデオ (

冊 子 (事業A,B,C: 1冊、事業C: 1冊)

その他 ()

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 4,636人

内 訳 (事業A: 4,348人/B: 30人/C: 180人/D: 18人/E: 28人/F: 32人)

(1) 事業の実施状況について

①「わたしの美術館展」(2005年7月29日～8月31日) 入場者数:26,685人

A) 事業名:「わたしの美術館展 ワークシート・プログラム」(写真1)

期間:2005年7月29日(金)～8月31日(水)

会場:横浜美術館

小学生向けワークシート:

小学校高学年を対象とし、作品をよく観察して、自分の言葉で作品についての感想を表現することを目的とした。出品作品から数点を選び、クイズ形式の問いかけに答えることによって鑑賞を深められるように作成した。作成にあたって、横浜市立小学校図工研究会の教員からの意見をヒヤリングして内容を検討した。ワークシートは、学校を通して横浜市内の小学校5,6年生全員に配布し、夏休み中に各自が展覧会場で取り組むように配慮した。授業であらかじめ展覧会の概要や美術鑑賞についてとりあげて、生徒の意識を高めてもらった。

中学生向けワークシート:

自分の好きな作品1点を選び、さまざまな角度から作品を深く鑑賞し、作品について自分の言葉で表現することを目的とした。最終的には、作品について400字から800字程度の文章にまとめてもらった。作成にあたっては、横浜市立中学校美術研究会の教員からの意見をヒヤリングして内容を検討した。また、美術研究会総会などで、美術科の教員にワークシートの趣旨を説明し、学校における鑑賞授業とのタイアップをはかった。

B) 事業名:「わたしの美術館展 親子アート・クルーズ」(写真2)

日時:2005年8月17日(水)、8月27日(土)

14:30～16:00

会場:横浜美術館企画展示室

本展ワークシートを補助的に使用しながらギャラリー・ツアーをし、作品について参加者同士で語り合ったり、親子で作品のポストカードを使った工作を行った。制作した作品は展覧会場に展示した。作品を介する親子間、鑑賞者間のコミュニケーションを促して作品鑑賞を深めるばかりでなく、鑑賞から得た知見やイメージを膨らませ、それらを自分だけの作品作りに結びつけて、鑑賞と連動した創作の楽しみを知って貰うことを目的とした。

ワークショップ用の設営(会場用シート、工作台、椅子等)、工作に用いる道具や材料(カッター用ボード、ハサミ、のり、ボード、ポストカード、和紙、額)を準備し、ワークショップ補助のアルバイトおよびボランティアを募って、事前の研修等を行った。

C) 事業名:わたしの美術館展 市民のアトリエワークショップ「見る、視る、観る——あなたに見えているものは…?」(写真3)

参加アーティスト:エサシトモコ氏、後藤充氏

会場:横浜美術館

期間:2005年8月20日(土)、21日(日)、27日(土)、28日(日)、9月3日(土)、4日(日) 全6日

美術表現の基本となる「見る」という行為にスポットをあて、新しい表現の可能性につ

いてアーティストと一緒に考えることを目的とした。「わたしの美術館展」の展示室や美術館の建物をデジタルカメラで撮影し、それを作品として構成した。撮影することによって、「作品を見る」ということを考え、美術館の機能や役割について考察してもらった。さらにそれを自分の作品に再構成することによって、美術作品や美術館を「わたしにとっての特別なもの」として感じてもらった。

②「李禹煥 余白の芸術」（2005年9月17日～12月23日） 入場者数：27,999人

D) 事業名：ワークショップ「余白を撮る」（写真4）

参加アーティスト：森本美絵氏（写真家）

日程：Aコース・・・2005年10月9日（日）

Bコース・・・2005年10月16日（日）

場所：横浜美術館、グランモール公園、横浜トリエンナーレ会場

李禹煥展と、横浜トリエンナーレ 2005 の出品作品（いずれも戸外に設置された作品）を、参加者が第一線の写真家とともにポラロイド写真に撮るワークショップ。参加者は、写真家の作品といっしょに、でき上がった自作を美術館のグランドギャラリーに展示した。ワークショップが実施された日は両日ともに、あいにく雨天であった。参加者は、天候が被写体にもたらす慮外の視覚的効果を勘案し、期待していた画像と出来上がった画像の懸隔に戸惑いながら、戸外撮影に取り組んだ。眼前の作品とその周辺の空間、言わば、「余白」を意識してカメラのファインダーを覗くことによって、作品鑑賞のための新たな視点を各自で見つけ出す一助となった。また、展示を通して自作をプレゼンテーションすることの魅力と奥深さを体験していただいた。

③「クリストファー・クック展」（2005年11月16日～12月18日）入場者数：3,257人

E) 事業名：横浜市立高等学校との連携プログラム「クリストファー・クック ワークショップ」（写真5）

参加アーティスト：クリストファー・クック氏

日 時：2005年11月23日（水・祝） 13:00～16:00

場 所：横浜美術館子どものアトリエプレイルーム

横浜美術館アートギャラリーにて展覧会を開催したイギリスの画家、クリストファー・クックによるワークショップ。横浜市立の高等学校のうち、6校に所属する学生計20名が参加した。クックによるレクチャーとデモンストレーションを行い、平滑な紙やアルミニウム板に黒鉛の粉とオイルを用いて描く彼のユニークな絵画技法を紹介した。その後、参加者全員で作家と同じ画材を用いて制作体験をした。できあがった作品を並べ、作家と共に互いの作品を鑑賞した。最後に作家と共に展覧会会場へ行き、共に作品を鑑賞するとともに、作家による解説を通して作品に対する理解を深めた。当日制作された作品の一部は、横浜市民ギャラリーにて開催された横浜市立学校図画工作・美術・書道作品展[2006年1月28日（土）～2月1日（水）]において特別展示された。

F) 事業名：市民のアトリエ ワークショップ アート・チャレンジ・プログラム「クリストファー・クック レクチャー・公開制作とワークショップ」（写真6）

参加アーティスト：クリストファー・クック氏

日 時：2005年11月20日（日）10：10～16：10

場 所：横浜美術館市民のアトリエ平面室

イギリスの画家、クリストファー・クックによるワークショップ。午前中は、クックがこれまで制作してきた作品について、スライドを用いて解説したのち、デモンストレーション制作を行い、平滑な紙やアルミニウム板に黒鉛の粉とオイルを用いて描く彼のユニークな絵画技法を紹介した。午後は、クックの指導のもと、参加者に制作体験をしてもらい、できあがった作品を元にディスカッションを行った。

（2）地域との連携について

A) から F) のいずれの事業においても、市民ボランティアを募り参加していただいた。事業 A においては、ワークシート（小学生向け、中学生向け、各 1 種類）の作成にあたって、横浜市立小学校図工研究会および横浜市立中学校美術研究会の教員から意見を聴取し内容を検討した。また、学校を通して、ワークシートを市内の小学校 5、6 年生に配布し、夏休み中に各自が展覧会場で取り組むように配慮した。授業であらかじめ展覧会の概要や美術鑑賞についてとりあげて、生徒の意識を高めてもらった。美術研究会総会などで、中学校の美術科の教員にワークシートの趣旨を説明し、学校における鑑賞授業とのタイアップをはかった。事業 D では、横浜トリエンナーレ事務局およびキュレーターに事業の趣旨を事前に説明し、作品の撮影について特別の許可をいただいた。事業 E では、横浜市立高等学校教育研究会美術工芸部会に所属する教員の協力を得て、参加校（横浜市立金沢高等学校、横浜市立東高等学校、横浜市立南高等学校、横浜市立桜丘高等学校、横浜市立戸塚高等学校、横浜市立横浜総合高等学校）および参加学生を募った。

（3）成果物について

事業 A：ワークシート『好きな作品を自分のことばで語ってみよう』（2 色刷り）

ワークシート『展示室たんけん！作品と仲良くなろう。』（4 色刷り）

缶バッジ（1 種類）

事業 A、B、C：報告書（1 種類）

事業 D：報告書（1 種類）

（4）参加者の反応

当館では、前年度に開催した「マルセル・デュシャンと 20 世紀美術」展において、一般来館者向けのワークシートを本格的に試みたものの、児童・生徒を対象にしたワークシート事業は未着手であった。こうした事情もあって、事業 A において児童・生徒向けのワークシートに取り組んだが、小中学校の教員からも高い評価を得ることができた。また、児童・生徒に限らず、子どもとともに取り組む保護者も数多く見られた。ワークシートの内容や表記方法などについては概ね好評であった。ワークシートに取り組んだ子どもにはオリジナル缶バッジをプレゼントし、子どもたちの強い関心を引いた。事業 B への参加者からは、作品鑑賞と制作を結びつける試みとして好意的な評価が寄せられたが、途中のディスカッションにおいては、参加者の年齢によって内容や興味の在処にばらつきがみられ、ナビゲーションに更なる工夫の余地が認められた。事業 C、D につ

いては、写真作品の制作にとどまらず、カメラという媒体を通して、ものの多様な見方を発見できたといった感想が多く参加者から寄せられた。事業E、Fにおいては、ともにアーティスト本人によるデモンストレーションやアーティストとのディスカッションを通して制作に取り組んだことによって、作品素材の奥深さや技法のユニークさをより実感をともなう体験できたことに、参加者の高い評価が寄せられた。

（５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

横浜美術館は、「みる」（展覧会）、「つくる」（アトリエ）、「まなぶ」（美術情報センター）の連携を基本方針として活動を展開してきたが、必ずしも、それらの連携が十分に果たされてこなかった。こうした反省を踏まえ、本事業では、館蔵品と現代美術を出品作品とする３つの展覧会において、親子・子供・市民を対象とする６パターンの教育普及プログラム（ワークシートとワークショップ）を、学芸部門（みる）とアトリエ部門（つくる）が協働して企画実施してその効果を検証した。

本事業の実施によって得られたノウハウに改良を加えて、展覧会事業を中心に今後のさまざまな事業において、継続的に教育普及に関するプログラムを展開していくための展望を得ることができた。具体的には、本事業の成果を参照して、本年度開催したすべての展覧会において児童・生徒向けのワークシートを試みるとともに、幅広い内容のワークショップを試み、来館者から高い評価を得た。